

学位の金婚式

Zum goldenen Jubiläum der Dissertation

1956年10月、南回り48時間に及んだプロペラ機と列車を乗り継いで Braunschweig に到着した。底冷えする空気の中、低く垂れ込めた雨雲に突き刺さるような教会の尖塔を見上げると、25万人都市の唯一の日本人として暮らす不安がこみあげてきた。それから2年間、DAAD 奨学生として THの Institut für Strömungsmechanik で Doktorand として研究に励み、Dr.-Ing. の学位を得て 58年9月に帰国した。

Nach der Bekanntgabe meines Erfolgs führen mich meine Kollegen in Braunschweig im Fahrradanhänger durch die Stadt. Zurück in Japan wurde ich, der ich als Ingenieur von einem Privatunternehmen das DAAD-Stipendium bekommen hatte, Universitätslehrer, um Ingenieure auszubilden. Diese Wende verdanke ich dem DAAD.

それから半世紀、語りたことはあまりにも多いが、学位試験の当日に限って思い出を記し、この30周年記念誌に寄せられる皆さんの思い出の一つに加えていただきたい。

ドイツでは学位論文を提出すると、審査委員会が結成され、二ヶ月後に論文の内容と関連分野について口頭試問が行われる。私の場合は、58年の6月に論文を提出し、審査委員長に

水力機械の名著で有名な Pfleiderer 大先生、審査員に Schlichting、Petermann の両教授が任命された。8月に口頭試問の日がやってきた。正装して大学本館に赴き、三先生と握手してから試問が始まった。論文自体に関する質問は、自分でやったことであるからそう困ることは無いはずである。問題は、何を聞かれるか分からない関連分野の実力テストである。いろいろ聞かれたはずであるが、一つだけよく覚えている。それは、翼列の翼に働く力を、目の前で導いて見せよというものだった。基本方程式から出発して最後まで間違いなく導出できたのは、ツイていたというべきか、どうやら長い試問も切り抜けることができた。

試験が終わると、廊下でしばらく待つように言い渡された。中で合否の

判定と、合の場合は成績を相談しているはずである。待つことしばらくして、ドアが開いて Pfleiderer 先生の巨体が現れ私の方に近付いてきた。やがて手を差しだし握手して言うてくださった。

Ich gratuliere! Sie haben mit Auszeichnung bestanden.

うれしさがこみ上げた一瞬だった。短期間で仕上げた学位論文に最上の成績が付くとは予想もしていなかった。厳しく指導して下さった Schlichting 先生のお陰である。

うれしさを味わう間もなく、Gersten 助手を始めとする研究所の同僚がわっと寄ってきて、密かに準備していた東洋すげ笠風の博士帽を私にかぶせ、日独国旗を立てたリヤカーに乗せ、それをみんなで



引っ張って町の中をパレードし始めた。博士帽の上には、研究テーマの二重翼列の模型が輝いていた。ああ恥ずかしい。でも大学都市 Braunschweig の住人は、慣れているせいか余り驚きもせずに手を振ってくれた。

私は、石川島重工業に在籍したまま留学したが、帰国後間もなく、母校の東大機械工学科に戻る話が始まった。学科の長老教授が、当時石川島の社長をしていた土光敏夫さんに面談し、移籍の交渉をした。そのとき土光さんは「会社で技術者として働くことも、大学で技術者を育てることも、どちらも大切。選択は本人に任せる」とおっしゃったと聞かされた。私は、結局は大学の道を選び、その後東大で33年間、工学院大学で15年間、技術者を育てる側に立ってきた。果たして土光さんが期待していたような技術者を育てているか、それがいつも教育者としての自責の根源にある。

DAAD 留学生として渡独していなかったら、私はずっと産業界で技術者としての道を歩んだだろう。たった2年間の留学が、私の人生の中でも最も大きな転機をもたらしたことになる。

大橋 秀雄, 機械工学 Maschinenbau, 1956-1958 TU Braunschweig, 工学院大学教授